
僕の妹が、こんなに友達が少ないわけがない

田中数奇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の妹が、こんなに友達が少ないわけがない

【Nコード】

N3605V

【作者名】

田中数奇

【あらすじ】

星奈が画策した「魔法少女」オフ会に、参加することになった小鳩。しかしそこは当然ながら一筋縄でいく集まりではなく……。「僕は友達が少ない」の二次創作です。

前篇（前書き）

前回の作品が高校組だけだったので、今回は中学生メインでいきますと思います。

小鳩ちゃんと……誰でしたっけ？

題名はあれですが、「俺の妹が」のクロスオーバー、あるいはパロディというわけではないのでご注意を。

どうぞ肩の力を抜いてお読みください。

前篇

それはある日の放課後だった。

「へえ、それじゃあ……」

「はい。理科はそれがいいと思います」

俺、羽瀬川小鷹がいつものように隣人部の部室にやってきた時。部屋の中では、珍しい光景が広がっていた。

理科と星奈の二人が何やら熱心に話しこんでいたのだ。

夜空は図書室に借りた本を返しに行くことで、今はいない。

部室には俺と星奈と理科と……あ、幸村もいた。

肝心の二人は、此方に背を向ける形になっていて何を話しているのかはわからない。

とはいえ、こいつらが話している内容と言えば決まっているだろう。どうせギャルゲーの話だろ。とおもい、ちらりとパソコンの画面を見てみると、どうもそういうわけではないらしい。

どうも何処かのウェブサイトを見ているみたいだ。てかここネット繋がったんだ。

「まあ、多分攻略するんならそのルートが一番いいと思いますね」
「少しだけ耳をそばだててみるが、やはり要領をえない。ギャルゲー的な専門用語か？」

仕方なく俺はソファアに体を沈めて、文庫本を開く。
こういう時に割って入れないから、リア充になれないんだろうなあ、とか思いながら。

それからまもなくして。

「とりあえず、さっそく準備してみるわ」

それじゃあ、と言って星奈は鞆をつかんで帰ってしまった。まだ全

然日が高い内に。なんだ、これまた珍しい。俺は思わず理科に話しかける。

「どうかしたのか、あいつ。……いや、いつもどうかしてるけどさ」「おっとセルフ突っ込みは止めてくださいよ先輩。先輩は理科につきこんでくれないと、理科困っちゃいます。あ、なんなら別のところにつっこんでくれても理科的にはオールオッケーなんで、いつでもどうぞ」

こいつもどうかしていた。

「で、何の話してたんだ？おまえらがあんなに話しこむなんて、珍しい」

隣人部の面々は、仲良しこよしというわけではない。「友達づくり」がモットーになるような部活ではあるが、いやむしろそんなものを目標にしている連中らしく、集まったメンバーはいずれも個性的かつアクが強い。そして協調性に著しく欠けている。

いや、俺は違うが。しかし「それならなんで友達がいないの」とか聞いてくる奴とは友達になりたくないので答えない。

まあとにかく、仲が悪いのは星奈と夜空なのはともかくとして、普段はお互いあんまり興味が無いような付き合いが多い。みんな部室内では我関せずで各々好き勝手にやっているのが常だし。

星奈みたいにパソコンでゲームしていたり、今俺の後ろに居る幸村みたいにぼうつとしていたり。

なので、さっきみたいな談笑は珍しい。

「いえいえ。ちょっとなんていうか、いろいろとアドバイスをしていただですよ」

「アドバイスって……ゲームとかのか？」

まさか勉強ということはないだろう。理科は相当頭はいいが、星奈もあんな奴だが勉強はできる。

俺の質問がおかしかったのか理科は脱力したように笑いながら、「

まあ、そんなところです」と応じた。

「キャラをどうやって攻略すればいいのか、迷っているみたいでしたので。参考になりそうな話を、ちょっとしてあげただけですよ」

「ふうん」

まあアレ系のゲームの良さは、俺にはよくわからん。まだまだ剣と魔法の世界に憧れるお年頃だ。

「詳しく聞きたいですか？理科と星奈先輩のひ・み・つ」

「いや。ま、それならいいさ」

理科の喜色悪い声音に、一瞬で興味が失せた。そうですか、と理科は肩をすくめた。

仲良きことは、美しきかな。もしかしたら今後生まれるかもしれない友情を感じながら、俺は文庫本に視線を落として、その話は終わりになった。

思えば、これがこれから起こる出来事の発端だったわけだが……今の俺には知る由もないのだった。

*

さて後日。

暇だということので久々にやってきた小鳩を部室に連れてきた俺は、

「ねえねえ小鳩ちゅわん」

と、気持ち悪い猫なで声でにじり寄る女と出会った。よく見たら星奈だった。

並んで歩いていた小鳩が、一瞬にして俺の後ろに隠れた。

「うー」

威嚇しているようだが、それは逆効果だったらしく、星奈は鼻息も荒く手をワキワキさせていた。

「ああ、ラブリーマイエンジェル、小鳩ちゃん……は、いけない

いけない」

と、突然正気をとりもどして、俺たちを部屋の中へ通してくれた。

「ささ、入って入って。ちょうどよかった。実は、話したいことがあったのよ」

嫌な予感がビンビンにしながらも、俺たちはソファーに腰掛けた。部屋には理科がコンピュータをいじくり、夜空が一人文庫本のページをめくっていた。

「実はね、今日は小鳩ちゃんにお願いがあつてきたのよ」

手を合わせながら、星奈はそう切り出してきた。

「実はね。私が参加しているSNSのサイトで、今度ちょっとした集まりがあるのよ」

SNS?と、俺が訪ねると、理科が解説してくれた。

「みんながウェブ上に自分のことを書いたページを作って、互いに交流するサービスのことですよ」

へえ。そんなのがあんのか。

「それで、みんなで趣味だとかテレビだとかの話をして、お友達になつたりするんです」

ほう。それは家に帰ったら、さつそく調べてみないといけないな。と、記憶のメモ帳に赤丸を付けながら、話に耳を傾ける。

「そこで実はあ、私も「魔法を使える中学生の女の子集まれ」コミュニティ」に参加してたの。最近ね」

「魔法をつて……」何を言ってるんだ

もうそれだけで特殊な集まりなんだろうということとはよくわかった。ついでに、星奈も特殊な類の人間なのだと改めてカテゴライズする必要がるあるようだ。

星奈は俺の目つきがうるんになつていのに気付いたのか、慌てて手を振った。

「いやいや、私も小鳩ちゃんと仲良くなりたかったから、色々と相談してたのよ。どうすれば仲良くなれるのか、教えてくれない?」

て」

なるほど蛇の道は蛇か。まあ、確かに今のところ小鳩に嫌われまくっている星奈にしたら、その相談はもつともだろう。まあ俺から見たら、嫌われてんのは普通に星奈の態度が悪いんだが。

「そしたらね、みんながその子と会いたいわって。同じ年頃の魔法少女の子たちが、みんなそう言ってるのよ。レイシスちゃんと、あつてみたいって、興味があるって話になつて」

「くつくく。闇の眷属たる我に、面会を申し出るとは。愚かな」と、口では威勢のいいことを言ってみせる。

「それで、その子達が今度近所で集まるらしいんだけど、それにこば……レイシスちゃんも、一緒にお茶でもしない？って話になったの。どう、レイシスちゃん」

「ふっ。魔法少女は一人でよい……」

などと黄昏てはいるものの、どうにもこつにも視線は俺の方へ向いている。

仕方がない。ため息をついて、俺は言った。

「お前なあ。そんな見ず知らずの集まりで妹のこと話して、そいつらに合わせてほしいって？」

「そうそう。是非是非、小鳩ちゃんには、この連中をぎゃふんといわせてほしいのよ。」

「おい、待てよ。そんな得体の知れない集まりに、うちの妹を勝手につれていっていいと思ってるのか？」

こういう場合には、さすがに俺だってガツンといわねばなるまい。あんまり勝手をされてもたまらない。

すると星奈は、ちよいちよいと近づいてくるようにジェスチャーする。

俺と星奈はふたり顔を近づけて、こっそり話す。

「なにいつてるのよ。あんだだって、小鳩ちゃんに友達が出来た方がいいと思ってるんでしょ」

「そりゃそうだけど……。てか、最初から合わせようとしてたのか？」

「だからあ、小鳩ちゃんに趣味の合うお友達ができたらいいなあって、そう思ったのよ。小鳩ちゃんの姉的な存在として」

だからなんでお前は勝手に羽瀬川家に混ざってくるんだ。星奈はその大きな瞳でこちらを見つめながら力説する。

「そのために、わざわざそんなインターネットを使ったりしたのか？」

「そうよ。そういう風にすれば仲良くなれるって、書いてあったものの」

書いてあったって……どんなマニュアル本を読んだんだろう。

「邪気眼と仲良くなる方法」「ゴスロリ少女の落とし方」「妹ティマニア」駄目だろくなくもんじゃないだろこれ。

「……もう一回確認するけど、中学生の女の子ばっかなんだよな」「ええ。みんな小鳩ちゃんをだいたい同じ趣味……だし、仲良くなれると思うわ。クロネクの話もしてたし」

クロネクというのは、「鉄のネクロマンサー」の略で、小鳩が好きなアニメでもある。

そうになると、うーん、と俺は考えざるをえない。友達作りにもいろいろあるが、こういうのはどうなんだろうか。

もともと部活というのと同じ趣向、同じものに対して情熱をもてる人間が集まる場所だ。そうになると、むしろ小鳩くらいになると、同じようなオタク気味の趣味の女の子たちと仲良くなった方がいいんだらうか。

しかし、この状態が続くというのも問題な気がするな。

俺の不安をよそに、星奈は熱弁を続ける。

「心配しないでって。もしものために、私がちゃんと小鳩ちゃんにこっそりついていって、様子を窺うから」

それにさ、と眉を吊り上げられる。

「あんただって、友達がほしいんでしょ。小鳩ちゃんだって、そう思ってるに決まってるじゃない」

それをいわれると、俺としてもぐうの音もでない。

しかし小鳩の意思でないから……いや、しかし……

こほん、と誰かがせきばらいをした。

「ま、まあ、自分のことは自分で任せればいいんじゃないか」

突然話しに割って入ったのは、夜空だった。

「そうよねえ。あんまり過保護な兄っというのは、どうかと思うわ」

「う、うむ、そうだ。だから、ほら、話しあうのはいいだろう、もう」

と、夜空はなぜだかひきつった顔で云う。俺はそれを言われて、自分が星奈と額を突き合わせて話しあいをしていたことに改めて気付いた。

「わっ！！」俺と星奈はぼどうじに跳びのいた。

「え、ええとさ。まあ、夜空がそういうんなら、俺も言うのはやめにするよ」

「え、そ、そうね。やっぱりそうすべきだと思うわ」

さじをなげたわけじゃないぞ。普通にそれで構わない、と判断しただけだ。お互い気まずい感じになりながらも、一応合意に達した俺たちは小鳩の方を見たのだが、

「や」

と、小鳩は素に戻って簡潔な答えでもって星奈を拒んだ。

が、さすがというべきか、というべきか、星奈はそれでも折れなかった。

「い、いいもんよ」友達は。ねえ。小鷹。兄として、妹さんに言うてあげてよ」

ええ……。お前、それを友達がいらない俺に言わせるのか。

KY力ここに極まれりだ。しかしふられた以上は、何かしらコメントを返さないといけない。

「ええと……。まあ、あれだ。居ないよりは、いるほうが、いいと思う……」がな」

「クク、そんなものがいたとして、一体どんな対価が得られるというのか。愚民よ、答えてみよ」

具体的な話をしろ、と言われてもな。なんだか胃が痛くなる。と、胃袋からふと連想した光景があった。

「ええと……そうだ、ラーメンとか。ほら、帰り道にいつしよに食って帰ったりさ。そういうのができるんじゃないか、な」

いや、喰ったことないけどさ。

このまえのどきメモで、そんな感じのシーンがあつて、地味に憧れていた。

しかしそんな俺の照れをよそに、小鳩はしばしきょとした後で、なぜだが顔を伏せてしまった。

俺たちはそんな小鳩に戸惑いながらも、お互いに視線を顔を見合わせる。何かまずいことをいつてしまったのだろうか。

しかしみんな首をかしげるばかりで、答えは出ない。

俺が何か言おうとしたところ、

「クククク。まあいいだろう。わが姿を、久しぶりに地上のものどもに見せつけてくれよう」

といった。

「ああ、ありがとう小鳩ちゃん！」

抱きしめようとする星奈を交わしながら、妹は唇をゆがめる。

「クク、まあいいだろう。己の力を過信した愚か者どもに、その身の程を思い知らせてやるとしよう」

などと悪役っぽい台詞をのたまうのだった。

俺は先ほど見せた小鳩の態度になにか引つかかるものを覚えつつ、その言葉にため息をついた。

果たして、友達づくりが成功するのやら。

「ふん、そんな目論見通りにいけばいいがな」

このときの夜空の言葉が、まさか本当に的中するとは、今の俺には思いも……あ、これさっきやったっけ。

まあそんな感じだったとさ。

*

そしてオフ会の当日。

「小鷹あ……………」

受話器を取った俺のもとに

「た、助けて……………」

星奈からのSOSが届いたのだった。

厨編（前書き）

この物語はフィクションです。実在の人物、団体、企業などとは一切関係ありません。

「……ええ。そうです。理科はアドバイスしましたね。星奈先輩に」
「んでアドバイスって、お前……そもそも何を、聞かれたんだ？」
「いや、答えてもいいんですけど、そもそもわざわざ理科に電話しなくても、本人に直接聞いた方が早いんじゃないですかね」

駅のホームで、俺はため息をつく。

星奈からの突然の電話。その剣幕に押されて大急ぎで俺は家を出た。そして今、星奈が居る場所。小鳩がピンチだという場所へ向かう電車に乗り込もうとしている。

「まあ。そうなんだが。……どうにも、あいつの話は要領を得ないんだ」

雑踏の中、しかも整理されていない情報をあれこれ聞くのは骨が折れたうえに、何やら一旦移動するから、ということで電話を切られてしまっていた。

そんななかでも事の経緯を聞くと、いくつか「理科」というキーワードが出てきたのを俺は聞き逃さなかった。かくして、今こうして理科と電話して間接的に情報収集に当たっているわけだ。

「わかりました。んで、私が聞かれた内容というのは、あるライトノベルのストーリーです」

「ライトノベルの？」

それが一体、どう小鳩につながるのか。

「まあ厳密に言えば、その中で小鳩ちゃんによく似ていると思しきキャラについての情報ですね」

「おまえ、それはまさか……」

「ええ。なんでも本を拾ったという話をしていたので、その内容を教えてあげたんです。なにやらその中に、中二病で邪気眼のキャラが出てくるという話をしたら、ひどく興味を示しまして」

うわあなんだかもう聞きたくない。しかし、小鳩に関わる話だ。聞かなければならない。

「ええ。そのキャラは、ネットで同じオタク趣味の仲間とのオフ会を通じて、主人公と仲良くなるのだと教えてあげたんです。それを実際にやってみたら、小鳩ちゃんが自分と仲良くなれるんじゃないのかって、柏崎先輩えらい興奮していました」

あちゃーそれでか。いや、その小説なら知っている。というか、俺も読んだ。

しかも、どこかで失くしていた。

……どう考えても、俺の本だよな、それ。

流行っているらしいので眼を通して見たのだが、思ったよりも地味な内容だったので、流し読みしていたのだが。

つまり今日小鳩が向かった先というのは、つまりはその、趣味の集まりということか。

「まあ、なんとなくはわかった。あ、電車が見えてきた。そろそろ切るぞ」

「あ、待ってください。柏崎先輩に聞いたっていうサイトのアドレス、こつちに転送してくれませんか？なんなら、ちょっと調べておきますから」

「ああわかった。頼むよ」

それだけ言って、携帯をポケットにしまうと、俺は電車に乗り込んだ。

待ってるよ、小鳩。

*

そんなわけで、電車で揺られて十分ほど。

俺はメールで指定された場所にむかった。

駅にほど近い公園の一角。そこの裏手に、星奈がいた。

「こ、小鷹。来てくれたのね」

と、ほっとした顔を見せる

自転車と電車を乗り継いで、大急ぎで駆けつけた俺は、星奈の顔を見て睨む。

「おい、星奈。どういことだよ、助けてって」

「そ、それが……その、小鳩ちゃんがオフ会に参加したんだけど、待ち合わせ場所がここなんだけど、その……」

星奈は茂みから公園の中をゆびさした。俺はその方向へ視線をやる。

「な、なんだありやあ……」

それは、異様な光景だった。

そこにいたのは美少女の群れだった。

つぶらな瞳。よく手入れされた、カラフルな髪。短めのスカート。相変わらずのゴスロリの小鳩もちろんそこにいる。

その小鳩と並んでも、遜色ないような色とりどり美少女達の群れ。なるほど、かわいいと言えはかわいいのかもしれない。世間一般の常識に当てはめても、その格好は確かに目立つ少女のものだ。

それが着ぐるみでなければ。

*

「……で、どういことなんだ、これは」

「うっ」

と、星奈は唸っている。

「こ、小鷹、怒ってる？」

とんでもない集まりに小鳩を巻き込んでくれたものだ、とは思う。本来ならば怒ってもいいのだろうとは思うのだが、なんというか、

その……まあ、怒りを覚えるにも正直あの姿では、毒気を抜かれてしまう。

うんまあヤバイと言えばあんなもんを着て往来を歩きまわってるあたり、どう考えても混じりッ気なしにヤバイのだけれど、なんだからなあ。

「……まあ、それはそれとしてさ。なにがあつたんだよ」

「だから、その……小鳩ちゃんを集まりにつれてきたら、その……あの人たちが来て、お待たせはわわーん！とかいつて来て……」

「つまり……あの面子が、お前がネットで紹介したとかいう「お友達」だったわけか」

「ど、どうやらそうみたいね……お、大きなお友達だったわけね。うはは」

「……」なんだろう、このザラつとする感じは。

「で、一体どういう集まりなんだあの連中は」

「だから……魔法少女」

俺と星奈の間を、冷たい風が吹き抜けて行った。

「だ、だから女子中学生限定っていう触れ込みだったの。だから私も思う存分はあはしながら、掲示板で喋ったりしてたんだけど……」

……

「それで一体どうやって、あんな一人デズニールみたいになことになるんだよ！」

そこで俺の携帯が振動するのを感じた。理科からの着信だった。

「どうも、理科です。……はい、確認しました。星奈先輩の言っているサイトですね。うわあ……あ、これは、ホントだ、きぐるみなりきりサークルですね」

「そりゃいったい何なんだ？」

俺の困惑に対して、理科はおもむろに語りだす。

「ええ、世の中には二次元、フィクションの女性キャラへの愛が高じて、そのキャラ自身になってしまいたいという男性が多くいます。

それをサイバースペース内ではあたかもそのキャラであるかのようにふるまう「なりきり」というプレイが可能になりました。しかし最近、それがさらなる進化を遂げつつあるわけです」

「それがあの……」俺はもう一度ため息をつきながら「きぐるみてわけか」

「そういうことです。ごっこ遊びの一種ですね。顔や肌を露出しないので、ある意味コスプレなんかよりもクオリティの高いなりきりを楽しめます。まあ全身を覆うっていうのはそれなりに大変ではあると思いますが、ある意味別人になりきれ、という意味ではこれほど楽なものはありません。最近ちよつとずつ流行っているみたいですね」

なるほど。さつきから聞こえてくる声がどれも男の声に聞こえてくるのは、そのせいなのか。

これは流石に日本オワタと言わざるを得ない。

「理科もたまに、ビグムになりたいと妄想することしきりですから、あまり迂闊なことは言えませんが……」

せめて人型にしておけよ。

「まあとにかく、彼ら自身が実際のところどうであるのかは正直分かりませんね。やりとりは確かに、うん、女子学生のかわいらしい心なごむゆるい感じではありますが……まあ、その文字をタイプした手は指毛とかボーボーだったりするんでしょうね」

止めてくれ。頭が痛くなってきた。

「まあ、何も全部が全部悪いとは言えませんが。サイトの規約にもあります。魔法少女として不適切な行動をとった会員は、退会もありえる、と」

そうか。いや、確かにこれまでのやり取りを見る限りでも、彼ら、いや、彼女ら？の行動は乙女そのものだ。両手を合わせて大仰に反応したり、しなを作って見せたりする。

クラスでもぶりっこと言われるちよつと痛い系の女子がとるタイプのオーバリアクション。

ていうか、表情が固定されているから、めっちゃ怖いんですけど。
とにかくだ。

つまりは……その、「なりきりキャラ」という部分に、女子中学生
というのも含まれていたわけか。

で、中身はとんだダークマターということが予測される。

「とにかく、理科はもうちょっとサイトの方を調べてみますね。な
にやら会員専用のページとかあるみたいですし、情報を集めてみま
す」

そんなわけで、理科との電話は一旦切った。

まったく、どうしたものか。俺はちよつと考え込んだ。

今のところは何ともないようだけれど、あの中に飛び込んで言っ
て無理やり小鳩を家に連れて帰ったりするべきだろうか。

しかし、今のところは何ともないし、それに一応小鳩も自分の意思
でついて言っているように見える。いつそ見た自分かりやすくチャ
ライ男ばかりだとか、不良だとかなら、もう少し事は簡単だった
んだが。うーむ、対人関係のあれこれはさじ加減が難しいな……。

「ね、ねえ。小鷹。……あれ」

そんな考える俺の袖を星奈が引く。

その指差す先には、ファミレスに入っていく魔法少女軍団の姿があ
った。

*

ファミレスは、異様な雰囲気にもまれていた。

「えー、それでは、さっそくなりきり板の魔法少女のお茶会を、は
じめたいとおもいまーす」

店の一角は、もはや異次元空間と化していた。そこだけ着ぐるみの
一段が占拠しているのだ。お店の人たちも開いた口がふさがらない。

近くに座っている客達も戦々恐々としている。ていうか、どうしてなかにいれたし店員。

俺と星奈はそこからほど近い、観葉植物が障害物になる場所を選んで陣取った。

とにかく、事の経緯を見守ってから行動を起こすことにしよう。

「……イーイー……」

テンション高いなこいつら。みんな全身を揺らしながら手を叩いている。

そして一人テンションの低い小鳩は、なんだかんだ言ってみんなの中心に座らされている。

どうやら小鳩は戸惑いと驚きで、ほとんど言われるまま為すがままの状態になっているらしい。

あいつの人見知りがこう悪い方に進むとは……。

此処にくるのだって、昔見たMIBに連行されていく宇宙人を思い起こさせるような様子だった。なんというか、悲哀を感じさせる背中だった。

「だいじょうぶですかにや？レイシスたん」

と、……いや、声は明らかに成人男性のあとボイスだけど。ええと、とにかく一人が声をかける。

「……っ！？（こくこく）」

と、顔を近づけられてぎょっとしながらも、必死に頷く小鳩。あれは虚勢を張っているって感じだな」

「はい注目」

と、そこでピンク色の髪をした少女の恰好をした人（長え）が、手を叩く。

「それじゃあ改めて、自己紹介をしたいと思います。あ、もちろんプライベートな質問や、バストウエストヒップが知れたかったら

……設定資料集を買ってね」

品を作ってそういうピンクに、皆がどっと沸く。おいおい、それ自己紹介の意味が果たしてあるのかというつつこみをする者は誰もい

ない。

しかしまあこうして普通の空間で、よくあんな感じで話せるものだ。死にたくないのか。

「ではまず。リードチャプター朝倉だによりん！まだ中学生だけど、大好きなお兄ちゃんのためにがんばるもん！」

俺が死になくなってきた。

*

「ま、まあまあ落ち着きなさいよ。たとえ着ぐるみでも、皆中身は女の子なのよ」

「おっさんだろ」

「いや、そうじゃなくて！心！心の問題よ。みて、あの雰囲気」

言われて、改めて集まりを見てみる。確かに容姿こそ威容だが、その場に流れている空気自体はなごやかなものだ。

そうだな。いや、まあ確かにたとえなりきりとはいえ少女のふりをしているわけだし。

「ね？ね？」

そうそうおかしいことにはならないかな。

「はじめまして。明美ゴモラです。好きなものは、かまどのおしっこです」

コーヒー吹いた。黒髪少女……の着ぐるみを着た人は、まんじりともせずにいる。「冗談ではないらしい。

「レイシスさん。よろしくね」

「く、くくくく……よろしくなのだ」

これには小鳩もドン引きである。

「もお、ゴモラちゃんってば」

「うふふ」

一体どんなアニメ、ゲームなんだろう。ちょっと小鳩には見せられないな。

俺は黙って、星奈をにらみつけた。星奈はあさつての方向を見ていた。

*

という感じで、ちょっとした予想外のやり取りにはなったものの、あとの自己紹介はさらりと進み、

「魔法少女、かまどマジかです。うえへへへへええ。みんな、仲良くしてくれたらうれしいなって」

そう言って、首を傾げるピンク少女で、最後となった。

くそ、声は明らかに男なのに、仕草と見た目だけ見れば美少女をトレースしてるのが腹立つ。

と、いう「痛い」という感覚がびしびしとそのまま俺の体にまで飛んできて、激痛にさいなまれる時間が続き、最後の一人というタイミングになった。

「それから、最後はまさかのノー着ぐるみ女子です。どうぞ！」

場が一気に盛り上がる。黄色い歓声ではあるんだけど、発せられる声はどれも太くて……なんか茶色い歓声、といった方が正しい気がする。そんな中でもうふらふらになっている小鳩が、よろよろと立ち上がる。

「く、ククく。わが名はレイシス・ヴィ・フェリシティ・煌。真祖の吸血鬼であるぞ。今回、特別に地上の戯れに参加してやることにした。か、感謝せえよ」

いかん、早くもキャラが崩れてきている。小鳩もビビっているのは間違いない。

まあ俺も正直、あの面子四方からガン見されたら、ちびらない自身はないが。

「わー！よろしくね、レイシスちゃん」

とはいえ、普段ならドン引きされるか冷笑されるかの自己紹介でも、

彼女ら……彼らは普通に受け入れてくれていた。ちょっと感動的な光景だ。

「……」

ていうか、さつきから俺は変なおっさんどもの実況しかしていない。もはや別物の小説になっけてきている気がする……。

そんなメタ的な想いを抱きながらも、俺は必死にぬいぐるみどもを監視する。

「それじゃあ、さっそく始めましょうよ」

大阪城を今にもぶっ壊しに行きそうな黒髪魔法少女は、そう言い放つ。

……動きがあつたらあつたで腹たつけど、なければないで不安になるな。表情がない分。

「そうだね、ゴモラちゃん！魔法少女のお茶会恒例の、ゲームをやります！」

周囲のメンツからぱちぱちと拍手が行われる。小鳩は怯えながらも、それに合わせる。

かまどさん（俺より明らかに年上）は、服のポケットから、お箸のようなものを取り出した。

「ルールは簡単だよ！六本あるこの棒にはそれぞれ数字が書かれているけど、一本だけ「魔法少女」と書かれた棒がある。その棒を引いた人は、二つの数字を選んで好きな命令を魔法の力で下せちゃうの！」

まんま王様ゲームやんけ！

「こ、小鷹……」

かつて散々あれな目にあっただけあつて、王様ゲームだと気付いた星奈の顔色も変っていた。

しかも、今回は男五人の群れに放り込まれてしまっている。小鳩が、一人で。

何とかしなければ。俺は焦りながら、頭を働かせる。

「せーの、魔法少女だーれだ！」

だが時は非常なり。

かまどちゃんの一声で、くしくも地獄のふたが開いたのだった。

厨編（後書き）

続きが遅くなって申し訳ありません。

読んでいただいた方にはわかると思いますが、一部の人のあらぬ誤解を招くような話になるかもと迷い、筆を置いていました。

が、どうせ大した数の人も読まないだろうし、いいかということで書き上げさせてもらいます。

苦情があれば、そのつど対応を考えるとということで、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3605v/>

僕の妹が、こんなに友達が少ないわけがない

2011年10月8日12時31分発行